

青春の一冊

玉井哲雄（東京大学大学院総合文化研究科）

青春時代に読んだ本の多くは小説であり、またそのかなりの部分が翻訳小説だった。もちろん、漱石、鷗外を始めとする明治以降の日本の小説も多く読んだが、当時の10代20代の人間は、おそらく現代の学生よりはるかに多く「世界文学」を読んでいたはずである。ここでいう世界文学とは、トルストイ、ドストエフスキー、スタンダール、バルザック、ロマン・ロラン、プルースト、トーマス・マン、ヘルマン・ヘッセなどの19世紀から20世紀にかけての、主として西欧文学の翻訳である。

当時は各出版社が競って世界文学全集を出していた。たとえば中央公論社の「世界の文学」は、1963年から1967年にかけて刊行された。これはちょうど筆者の高校から大学の駒場時代、つまりまさに青春を過ごした時期に重なる。それ以前から新潮社や河出書房などが、同じような翻訳全集を出しているが、これらは大正末から昭和にかけての「円本」の流れを汲むものである。つまり昭和40年代ぐらいまでは、大正以来の教養主義の流れが生きていた。その流れのせいかヨーロッパ文学が主だったが、その後、ラテンアメリカ、アジア、東欧などの翻訳も増えた。

現在、このような「世界文学全集」の出版は目立たないが、多くは文庫本で読めるはずだし、光文社がこのような「古典」の新訳を文庫本として出して話題になっているのを見ても、一定の需要はあるのだろう。

前置きが長くなったが、わが青春の一冊として挙げたいのは、トーマス・マン著、高橋義孝訳「魔の山」である。若き日にこれを読んで、とにかく圧倒された。ドイツの青年ハンス・カストルプが、いところが結核療養をしているスイスのサナトリウムを訪ね、そこに自らも囚われの身となるとともに、謎めいた弁舌家のゼテムブリーニとか狂信的な思想家のレオ・ナフタとか、不思議なほどにハンスを魅了するショーシャ夫人とかに会い、精神の彷徨を経験する。

20世紀前半の結核は青春を襲う恐ろしい病気だったが、閉ざされたサナトリウムという日常社会とは隔絶された空間で、めくるめく体験をするのである。その舞台が、現在では世界経済フォーラムが年次総会を開くことで知られるダボスであるのも、面白い。

しかし、物語の最後ではハンス・カストルプが戦争に行くという劇的な場面転換が起こる。ここで読者は、ハンスがダボスに入ってから後、第一次世界大戦が勃発していたことを知る。ハンスの精神の彷徨も、20世紀のヨーロッパという時代の流れから孤立したものではなかったのである。